

COP27の評価



令和4年11月29日

東京大学公共政策大学院特任教授

有馬 純

COP27の評価（1）

- グラスゴーは先進国の勝利、シャルム・エル・シェイクは途上国の勝利
 - 先進国は野心的な緩和作業計画を追求し、途上国がロス&ダム基金の設立等の資金支援を重視
 - 結果はロスダム基金設置が決定される一方、緩和についてはグラスゴーから前進なし。緩和作業計画を通じた新目標設定は盛り込まれず。
 - 途上国が「歴史的COP」と称賛する一方、先進国は失望を表明（例：クロージングセッションにおけるシャルマCOP26議長の発言「我々はグラスゴー気候合意を前に進めるためにここに来た。しかしグラスゴーのラインを守るために戦えねばならなかった。我々は2025年ピークアウト、石炭フェーズアウト、化石燃料フェーズアウトを提案したが、いずれも盛り込まれなかった」等。
- パッケージディールであったはずのロスダムと緩和が途上国に大きく傾斜する結果となった背景は？
 - 議長国エジプトの途上国（特にアフリカ）重視
 - 洪水被害を受けたパキスタンがG77+中国の議長国、島嶼国もロスダムをプッシュ
 - 中国等はアフリカ諸国、最貧国等の陰にかくれ、ロスダムを強く主張させることにより、自分たちを縛りかねない緩和作業計画を弱めることを企図。
 - ウクライナ戦争下において実質的に温暖化防止のモメンタムが弱まっている中、COPを決裂させるわけにはいかないという焦り（特に決裂を恐れていたのは先進国？）
 - 途上国が強く主張するロスダム基金を拒否してCOPを決裂させれば先進国に非難が集中する恐れ

COP27の評価（2）

- グラスゴー気候合意が内包していた矛盾の露呈
 - 1.5°C目標、2050年カーボンニュートラル特や、緩和作業計画を通じて目標引き上げをプッシュしようという欧米の戦略は、ある意味、パリ協定の再交渉に等しく、今年に入り、新興国等はことあるごとに反撃
 - エネルギー危機の最中に化石燃料フェーズアウトを主張する先進国には化石資源を有する途上国から反発（インドが「排出削減対策を講じていない化石燃料フェーズダウンを主張した意図は石炭ばかりを攻撃し、天然ガス利用には口を拭う先進国へのしっぺ返し）
 - 2050年全球カーボンニュートラルを唱える先進国 ← → LMDCは先進国に対し、2030年カーボンニュートラル達成と途上国への大幅な資金援助を要求。
 - 不確実性があるにもかかわらず、異常気象を全て温暖化の結果とする環境原理主義的議論が途上国のロス&ダメの要求に根拠を与え、先進国にブーメランとして戻ってきている状況
 - 他方、ロス&ダメ基金設立を勝ち取った途上国の高揚感も失望に変わる可能性大
 - 1000億ドルの目標すら未だに達成できていない中で気候資金（緩和・適応）ニーズは2030年までに5.8~5.9兆ドル。両者には埋められないギャップ
 - ロス&ダメへの資金ニーズは上記見通しに含まれていない可能性大。しかもロス&ダメ基金は new and additional！どこから資金調達をするのか？
 - 「財布」はできてもお金が入らない可能性。
- 実現可能性のない1.5°C目標と際限なくエスカレートする途上国の資金
- COPプロセスの持続可能性に疑問？